

学校点描

学校業務員のTさんが、一人で積雪に備えた校舎のそ垣（雪囲い）作業をしてくれています。経験から学んだ工夫があちらこちらに感じます。

《K中学校》

NO.14

R2. 10.23

9日には、3年生のK山学の発表会が行われました。1年生から調べてきたK町の良さと課題について、自分たちなりに提案したものです。1年生も2年生も先輩の発表を聞きました。M・Mさんは、漆野いんげんについて調べあげ、自分で考えたスイーツを作りたいと述べました。質問タイムで、私が「どうして漆野いんげんは、全国に流通しないの？」と尋ねると、「漆野いんげんは荒木家に伝わる希少なものです。」とすぐに答えてくれました。他にも空家を活用して、自動車学校の合宿所にと提案したのはM・Sさんです。子ども食堂やファミレスなど、M・Hさん、M・Hさんのアイデアが続きます。他にもニラをそばに練り込んだ“ニラそば”や、高齢者のために停留所の設置場所を移設するなんていう発表もありました。K・Aさんは、めごたまの保護者にアンケートして子育て支援の問題点を浮き彫りにしています。提案から実現までは、また大きな難しさがあるわけですが、中学生の考えに耳を傾けることで、町の活力が生まれそうです。

17日（土）にM町で開催された県新人北ブロック大会では、ソフトテニス部女子団体が見事優勝しました。次は、決勝大会が11月14日（土）にT市で行われます。地区のどの種目を見ても優勝したのはK中学校ソフトテニスだけです。それだけ、優勝は難しいのです。

21日（水）の夕方から、PTA本部役員会に引き続き、学校保健委員会をランチルームで開催しました。学校保健委員会は、学校保健安全法という法律でも定められているものです。残念ながら参加者は少なかったのですが、本校の学校薬剤師である安達俊介先生の『正しく知ろう 新型コロナウイルス』と題した講話は、ユニークな話を交えながら大変勉強になりました。安達先生は、講話の前に、今日のゴールとして、①『コロナを知って、安心安全に暮らす』②『親の威厳を取り戻す』を掲げました。コロナと親の威厳がどう結びつくのか、頭の中で話の行方を想像しながら、講話が始まりました。（詳細は保健だよりNO9を）

学習力格差社会

クラスが違う2年の女子生徒G・TさんとN・Iさんが向かい合って、美術の課題の“消しゴムはんこ”づくりに挑戦しています。G・Tさんは、与えられた大きな消しゴムいっぱいには魚を掘っていました。「釣りするの？」と私が尋ねたら、「お兄ちゃんの影響で釣りが好きなんです。ルアー（金属・木などで作った、ぎじ針）で釣るんです。」と答えてくれました。しばらくたってN・Iさんをみると、栗のはんこができあがって、スタンプ台を使って画用紙いっぱいには栗の模様をつけていきます。あっという間に秋の画用紙になりました。

第2回目のChoice Study（チョイス・スタディと言っています）を22日、23日の二日間にわたって行いました。この学習は、各教科からあらかじめ出された課題をDVDで説明し、学校に登校したら、自分で決めた時間割りにしたがって、自分の好きな場所で、課題に取り組んでいく学習システムです。日常の授業は、決められた時間割りを、学級という決められた集団の中で行うシステムなわけですが、そのシステムを思い切って崩した新しい試みをしているのです。2BのG・Tさんと2AのN・Iさんの“消しゴムはんこ”制作の場面はそのChoice Studyでの1コマです。

どうしてそのような試みをしているのか。理由があります。学ぶことは本来、熱中して夢中で行う行為のはずです。けれども、本校の生徒の授業の様子を見ると、学びに対して主体的に取り組む姿勢がまだまだ不足していると感じているからです。もっと、学ぶことの楽しさや、わかる喜び、

“わくわく感”を感じて欲しいと思って考えたK中学校だけの取り組みです。しかしその分、先生方の準備は大変なものがあります。例えば、理科の授業の課題は、中身がわからない3つの大きさの違う円柱をレールで転がしたとき、ブラックボックスを通過するとなぜか1つしかボックス前を通過しないというものです。理科教員がいろんなケースを考えて実験映像を撮影しました。1年男子のH・Rさんは、「磁石が入っているんじゃないか」とひとつの仮説を考えました。ただ、仮説は複数考えなくてはならない課題です。それ以外の仮説について悩んでいました。美術では、消しゴムはんこ”の制作が2年生に、“紅花染め”の課題が3年生に出されています。3年生の数名が一生懸命、紅花をぬるま湯につけて色素を絞り出しています。水道水ではオレンジ色（ピンク色？）に、重曹を入れてアルカリ性になると真っ赤に染まるみたいです。美術室には、佐藤先生が用意したたくさんの紅花の花が水につけられています。国語の教科は、読書感想画の課題が出されています。1年男子のO・Sさんは図書室で、傍らには『わたしのいもうと』の絵本が置いてあります。

「いじめられて自殺した妹の話です。いじめられて自殺した妹と、いじめたことを忘れて楽しそうに生きるいじめた側の同級生と対比して描きます。」と図案を話してくれました。

一方で、この学習システムでもなかなか集中できない生徒もいます。しかし、粘り強くどんな生徒たちにも“学ぶことの大切さ”を教えないといけません。これからの社会は、どこの学校を卒業したかの“学歴格差”から、自ら課題を見だし学ぶことができるかの“学習力格差”に変わります。いや、すでに変わっています。学び続けないとキャリアアップできない社会なのです。

安達先生は、話の合い間に、親と子がLineをして会話しているスマホの絵をスクリーンに出します。「今日皆さんに話したことを、お子さんに伝えて下さい。“知的さ”は親の威厳につながります。」先生が、この講話のゴールを“親の威厳を取り戻す”にした意味がなんとなくわかりました。



知的になることは家族を守ることなのです。知的な大人こそ家族の幸福を守れるという話です。

「ブラックバスも釣れます。川でも釣れますよ。」と教えてくれたG・Tさんの目はきらきらしていました。好きな釣りも、学校の学びも同じ目の輝きになればいいなあと思います。

画用紙には、大きな口を開いたブラックバスが見事にスタンプされていました。

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。